

定例研究会要旨

日時：平成 27 (2015) 年 5 月 20 日 18:00~20:00

会場：東京外国語大学 語学研究所

題目：「認知言語学から見た英語の構造：前置詞・不変化詞を中心に」

発表者：大谷直輝（東京外国語大学大学院総合国際学研究院講師 / 英語学、認知言語学）

本発表は、発表者の近年の英語の前置詞に関する研究の紹介を行った第一部と、英語の前置詞の具体的な事例研究を行った第二部からなる。

第一部では、発表者が近年、認知言語学、談話・機能言語学、コーパス言語学などの立場から行った研究の紹介を行った。近年の発表には、前置詞の多義性、反義的な前置詞間に見られる非対称性、前置詞の副詞形である不変化詞の完了用法の特性、句動詞の目的語の性質、前置詞句の名詞的な用法、前置詞の直示的用法など、前置詞の文法・意味・談話に関する様々な現象が関与する。特に、内容語と機能語の中間的な特性を持つ品詞である前置詞の多様な振る舞いを論じるにあたり、文法だけではなく、文法の構造を動機づける認知的な要因や談話的な要因を考慮することの重要性を具体例を用いて指摘した。

第二部では、認知言語学に基づく、言語研究の事例として、英語の前置詞 *over* と *under* に見られる支配的意味の分析を行った。ここでは、*over* と *under* に見られる異なる支配的意味が空間軸上の上下の非対称性によって動機づけられる可能性を示唆した。以下に発表内容をまとめる。

従来の研究では、英語の前置詞 *over* と *under* には、(1)や(2)のような支配的意味がある点が指摘されている。

- (1) (a) He has a strange power **over** his brother.
- (b) He has no control **over** the length of speeches.
- (2) (a) He has fallen **under** her influence.
- (b) They are **under** contract.

(1)と(2)の各文は、「支配者が被支配者に対して、力を行使する」点で先行研究において支配的意味に分類されている。先行研究では、特に、*over* と *under* の支配的意味は共通の基盤に基づいて、空間的意味から派生すると指摘している。例えば、Lakoff and Johnson (1980)では、支配・被支配の関係が空間的な上下の関係に見立てられることにより、空間的意味から支配的意味への意味拡張が生じるとしている。

一方、本発表では、*over* と *under* に共通して見られる特性ではなく、両者の支配的意味に見られる非対称的な特性に注目する。特に、*over* と *under* の支配的意味に見られる次の2つ

の相違点を指摘する。第一に、*over* と *under* の支配的意味では、両者が現れやすい文型が異なる。*over* 句は名詞句内に現れる一方、*under* 句は補語や付加句 (adjunct) として現れる傾向がある。また、*over* は他動詞と、*under* は自動詞と共起する傾向が見られることから、*over* は、*under* に比べて他動性が高い支配を表すといえる。第二に、*over* と *under* では、支配力の種類が異なる。*over* は、直接的で特定化された力の行使を表すが、*under* が表す力は特定性が低く一般的な力を表す。すなわち、*over* では、主語位置に現れる支配者は典型的には人間か組織であり、被支配者に対して意志をともなって直接的な影響力を行使する。一方、*under* では、支配者は無生物であることが多く、(2b)のように、支配者は必ずしも言語化される必要は無い。*under* の支配的意味は、被支配者が何らかの支配下に置かれた状態を表す。

次に本発表では、この *over* と *under* の二種類の支配的意味が、人間による上下軸の非対称的な捉え方によって動機づけられる点を論じる。我々が経験する世界において我々が何かの上に居る場合、下のものと接触していることが多い。この場合、重力によって、上のものから下のものに圧力がかかる (例 人間と床の関係など)。一方、何かの下に居る場合、重力があるため、上のものとは接触しないことが多く、上のものから圧力もかからない (例 人間と天井の関係)。この上下に関する非対称的な経験が、*over* と *under* の支配的意味の違いを動機づけると考えられる。すなわち、*over* の場合、我々が何かの上に居て、下のものへと直接的な圧力をかける経験が、意志を持った主語による接触を伴う直接的な支配の基盤になると考えられる。一方、我々が何かの下にいる場合は、上のものとは接触をしないため直接的な圧力はかからない。また、上にあるものは天井のように無生物であり我々よりも大きいものが多い。*under* の支配的意味は、「何らかの下に置かれた状態」が「何らかの影響下におかれる支配」へと見立てられることにより意味が広がると考えられる。

また、*under* 句は *over* 句とは異なり、付加詞的なセッティング用法が多く見られる。何らかの支配の及ぶ範囲を表す *under* 句のセッティング用法は、(3)が示すように、*if* 節と同様に、仮定法の帰結節の導入部を導く場合がある。

(3) (a) *Under* the agreement, the prices would increase.

(4) (a) [?]*Under* no agreement concerning the matter, the prices would increase.

(b) ^{??}*Under* no agreement, the prices would increase.

一方で、(4)の対比が示すように、*under* のセッティング用法は空間的な場所が喚起できない場合は、容認可能性が低くなる。(3)と(4)の対比から、*under* では、文法化が進み、仮定法の帰結節の導入部を導くマーカーとしての機能が定着しつつあるが、同時に、元々の意味である空間的意味を残していることが分かる。

以上の考察から、本発表では、人間が認識する世界の垂直軸における非対称性によって、*over* と *under* の非対称的な支配的意味が動機づけられる点を明らかにした。また、意味を生成する基盤としての身体経験の重要性を示唆すると同時に、語彙が持つ「意味」だけでなく「機能」に関しても身体的な経験を考慮しながら分析することの重要性を示した。